

1. テキスト

「内部知覚について」106頁10行目から108頁2行目まで。

2 テキスト要約

カントは超越論的自我と経験的自我を区別する。超越論的自我は対象化することはできない。それ故あるともないとも言えない。これに対し経験的自我は対象化されたもので、これについてはあるとすることができる。この有は経験的な意味での有である。テキストで問題になっている「認識主観」とは超越論的自我の方である。そうして「カント哲学の立場からしては許すべからざる考であろうが、認識主観は主観たるが故に、何處までも有の意義を離れることはできぬ」といわれる。この「有」は超越的な意味での有、直観の有である。カントは超越論的自我を直観する知的直観を認めなかった。「認識主観は主観たるが故に」という根拠の意味が不明であるが、「働くものの自覚」(108)のことを念頭に置いているのかもしれないが、ここはひとまず置いておく。

カントは与えられた雑多な材料(感覚内容)に形式(感性の形式=時空、悟性の形式=カテゴリー)を与えて統一したものが認識であり、これによって実在界が成立すると考える。この統一を行うものが超越論的自我である。そうして材料はあくまで雑多なものとして「与えられた」ものである。これに対して西田は、認識主観はこの材料を「与える」と考える。しかもそれは「形なき雑多」ではなく、「一つの体系」であり、それを「実在」としている。この実在は経験的な意味ではない。それ故「我々は自己の深い奥底に還ることによって、実在を見る」といわれる。この「見る」は直観である。したがって「還る」とは判断以前に還ることであり、述語以前の主語に還ることである。「自己の深い奥底」に還ることが、実在を与えることである。

この「実在」は「自己以上のもの」(107,4行目)であり「自己自身を包むもの」(同9行目)である。その中でまず認識主観は感性(見る、聞く)として働く。それは「時」の中で働くということである。それによって「思惟作用其者の基」となる「直接の経験内容」が与えられる。そうして「我は時の中に於て思惟することになる。「実在界は思惟によって与えられるのではなく」は、以前「認識主観は、同時に経験内容を与える主観」(106,後ろから3行目)といわれていたのだから、整合的に理解するためには「実在界は(単に)思惟によって与えられるのではなく」と解すべきであろう。

ところで西田は「働くこと」即ち「見ること聞くこと」さらに「思惟すること」によって「実在」が(自己に)内在的になるとするが、それを打ち消して「否我が真理に帰し、我が実在に帰す」と言う。そうして「我々はいつでも全然我を没し尽して、主客合一となる所に有を見るのである」とされる。没せられる「我」は対象化された我、経験的自我である。「有を見る」というのももちろん直観であり、有もそうした有である。「いつでも」とあることから、これは特殊な精神状態ではなく、我々が気づかずに素通りしている平常の出来事であることが分かる。

次に「繫辞の「ある」と物があるの「ある」との区別」とある。繫辞の「ある」とは「である」の「ある」で、判断の有である。これに対し物があるの「ある」は「がある」の「ある」で、判断以前の有、直観の有、述語以前の主語の有である。働き(見ること聞くこと、さらに考えること)が対象化されない仕方で、ということは対象化して見、聞き、考える在り方が破れる仕方で「純なる作用」(106,2行目)となる時、即ち働くものが自己同一となる時、そこに「直覚」が成立し、それが「判断の根柢」となる。すなわち繫辞の有の根柢の、述語以前の主語の有となるのである。働くものから見るものへ、である。

3. 哲学的問

直観の有において悪は存在するか。悪の起源はどこにあるか。